

『現代詩／詩論研究会』第三回
『夏の大合宿2015』谷川俊太郎をめぐって

出発期の谷川俊太郎

——『二十億光年の孤独』を中心に——

二〇一五年九月六日（日） 加藤邦彦
於・キャンパスプラザ京都

■五〇年代詩人について

【資料1】大岡信「戦後詩概観」第四章「感受性の祝祭の時代」（『蕩児の家系——日本現代詩の歩み』思潮社、二〇〇四年七月復刻新版。初版一九六九年四月）

詩というものを、感受性自体の最も厳密な自己表現として、つまり感受性そのものので、をはのごときものとして自立させるということ、これがいわゆる一九五〇年代の詩人たちの担ったひとつの歴史的作用だったといえるだろう。それは、ある主題を表現するために書かれる詩、という文学的功利説を拒み、詩そのものが主題でありかつその全的表現であるところの、感受性の王国としての詩という概念を、作品そのものによって新たに提出した。その意味で、一九五〇年代の詩は、何よりもまず主題の時代であった「荒地」派や「列島」派に対するアンチ・テーゼとして出現した。僕はかつて「肉声」で言うたうこの必要について書いたことがあるが、そこで用いた「肉声」という直観的な概念の内容を、もっと分析的に説明すれば、右にのべたような性質のものだったのだということができる。さきあげた「權」「汎」「今日」その他の詩人たちから、一九五〇年代末期の「鰐」に至る、この時代の一群の詩人たちは、感受性そのものを、手段であると同時に目的とする詩、言いかえると、言葉の世界への一層深い潜入ということが詩の目的そのものでありうることを、彼らの詩そのものによって語っているような、そんな詩を書きつづけてきた。

【資料2】 同右

彼らにとつて、信じるに値するものは、何があったか。感受性——このおよそ頼りなげな一語によって表象される人間のナイーヴな能力が、ともかくもまず拠るべきものとして、彼らの内部に育てられはじめた。「あの空や、土や、真夏の太陽」が、彼らの内部に、歴史を超え、政治を超えるもののごとくひろがりはじめたのだ。それは、彼らが現実の空や土や太陽に思いを寄せ、季節と自然に従順に、抒情しようとしたことを意味するものではない。逆に、あの空も、土も、真夏の太陽も、すでにどこにもないのである。つまり、それらはシンボルとして彼らの中に生きているのであった。言いかえれば、『言葉』として生きているものにはかならなかった。（中略）

このことを僕は、正確に僕自身の経験として語っている。そして、こう書きながら、その当時（すなわち一九五〇年ころにはじまる数年間）に、僕自身も同人の

一人に加わっていた川崎洋、茨木のり子、谷川俊太郎、友竹辰、水尾比呂志、中江俊夫、岸田稔子、吉野弘らの「權」や、堀川正美、山口洋子、山田正弘、江森国友らの拠っていた「汎」、また飯島耕一、岩田宏らを含む「今日」さらには安水稔和、嶋岡晨、入沢康夫といった同世代の詩人たちの作品を読みながら感じていた、ある種の共感覚、直観的な了解の感じを、再びまざまざと僕自身のうちに甦えらせている。

*今回取り扱うのは、右のうち、谷川俊太郎。「權」の詩人のひとりだが、今回は同人加入以前の出発期を問題にしたい。個人的な関心としては、谷川俊太郎のつぐられ方、に興味がある。

■『二十億光年の孤独』出版まで（年譜・伝記的事項の確認）

三一年 父徹三、母多喜子の長男として誕生。

四五年 七月、京都府久世郡淀町に疎開。京都府立桃山中学校に転校。

四六年 三月、都立豊多摩中学校に復学。

四八年 北川幸比古のすすめで詩を書き始める。校友会誌「豊多摩」、ガリ版刷の詩誌「金平糖」に詩を発表。商品目当てで受験雑誌「螢雪時代」「学苑」に詩を投稿。ノートに詩を清書開始。

四九年 定時制に転学。

五〇年 「螢雪時代」一月号の神保光太郎選「読者文芸（詩）」の二席として「雲に寄せて」が掲載。高校名「都立十三高夜間部」、ペンネーム「棚川新太郎」。定時制を卒業。大学進学の意味がなくなる。「学苑」八月号の太木惇夫選「懸賞文壇入選発表（詩）」の二席（賞金五〇〇〇円）として「祈り」が掲載。「詩学」九月号の「詩学研究作品」欄に「秘密とレントゲン」「五月の無智な街で」が掲載。「文学界」二月号に「ネロ」の総題で「ネロ」「地球があんまり荒れる日には」「演奏」「病院」「博物館」「二十億光年の孤独」が掲載。五一年 「詩学」二月号の「詩学審査委員会推薦作品（第一部）」欄に「山荘だより」（1・2・3）が掲載。この年、

歴程同人となり、三月、「歴程」第一〇号に「お伽話（ノート）無題」の「譚（お伽話1）」、第一一号に「墮輪」、第二二号に「暗い翼」が掲載。「婦人画報」七月号に散文「訪問」が掲載。九月、北川幸比古の詩集『草色の歌』に「跋」が収録。一〇月、銀座さえずりギャラリーで開催された第一回「歴程」展に詩を出品。

五二年 「歴程」第一三号に「町」が掲載。「詩学」二月号に「お伽話」として「お伽話2（昔と今と）」「お伽話3（日日）」「お伽話5（追憶）」が掲載。「新潮」三月号に「現代詩人詩抄」のひとりとして「今日」「挽歌」が掲載。「歴程」第一四号に「都市」が掲載。五月、「現代詩集 歴程篇」に「それらがすべて僕の病気かもしれない」「静かな雨の夜に」「小さな花火」「メス」「暗い翼」「お伽話」が収録。六月、『二十億光年の孤独』を創元社より刊行。最初は雲井書店より刊行予定だった。「詩世紀」七月号に「朝」「留守」が掲載。「詩学」

一二月号に「ネロ」が掲載。「婦人公論」一二月号に「皇太子殿下への手紙」のひとつとして散文「まず人間として生きて下さい」が掲載。

*参照／「谷川俊太郎自筆年譜＋資料（エッセイ）一九三二年―一九八八年」（現代詩読本特装版 谷川俊太郎のコスモロジー）思潮社、一九八八年七月）、田原編「谷川俊太郎 年譜」（谷川俊太郎詩選集）3、集英社、二〇〇五年八月）、山田馨作成「谷川俊太郎年譜 1931-2012」（『自選 谷川俊太郎詩集』岩波書店、二〇一三年一月）、三浦仁編『日本近代詩作品年表』昭和篇（秋山書店、一九八六年二月）、『歷程大冊』（思潮社、一九七三年六月）など。

*「豊多摩」に発表されたのは「青蛙」「つばめ」「教室にて」「あるもの」の四篇。「金平糖」に発表されたのは「かぎ」「白から黒へ」。いずれも実物未見。雑誌「金平糖」は北川幸比古「二十億光年の孤独」の頃（『現代詩読本特装版 谷川俊太郎のコスモロジー』所収、初出「日本児童文学」一九八八年四月号）に言及があり、「かぎ」が引用されている。また、『谷川俊太郎詩集』（角川春樹事務所・ハルキ文庫、一九九八年六月）に「白から黒へ」が収録されている。

* 出発期に影響を受けたのは、岩佐東一郎。ほかには、近藤東や城左門（大岡信・谷川俊太郎・井上ひさし・小森陽一「昭和の詩——日本語のリズム——」、「座談会昭和文学史」第六巻、集英社、二〇〇四年二月）。

* 「螢雪時代」「学苑」以外に「学窓」にも投稿していたとのことだが（「詩を書き始めの頃」、「現代詩文庫」27 谷川俊太郎）思潮社、一九六九年十一月）、未調査。* 出版社が雲井書店から創元社に変更になったのは、雲井書店が倒産したため。紙型を父徹三が買い取る形で出版された（山田馨「解説」、「二十億光年の孤独」集英社文庫、二〇〇八年二月）。

* 「二十億光年の孤独」広告類、未調査。雑誌「創元」を確認する必要あり。

■同時代評

【資料3】 神保光太郎「選後評」（『螢雪時代』一九五〇年一月号）

第二席の棚川さんの場合も、三田さんの作品のように童話的雰囲気を読者の心をとらえる。ところどころ未熟な用語もあるが青年特有のどこかいたずらっぽい、しかし限りもなく純粹な精神が貫かれていて好意が持てる。

【資料4】 村野四郎「テクニツクの方向——研究会作品評——」（『詩学』一九五〇年九月号）

谷川俊太郎君の「秘密とレントゲン」ここでは人間は一つの組織である。精神と肉体との渾沌とした塊として人間を見ない。その思考にはレントゲン氏の眼のような一種のすがすがしさがある。

つまり僕を通過するひとつの体系

それによって表現される僕という世界

などという思考は新鮮な詩的美の世界であり、非常に洗練された表現技術である。だが

病院では肉体の秘密がない

そのため精神はますます多くを秘密にする

というオチは、がくりと精神が脱落して、あまり感心しない。同君の「五月の無智な街で」は清潔で新鮮なテクニツクだが、この詩のもつ青年のイデオに少しの疑問をもたせられる。最後の連がこの疑問を一層つよくしていると思われる。つまり、

天上からの街頭録音のために僕はたくさんの質問を
用意している

しかし地獄からの脅迫のために僕は武器を持たぬ

は、おもしろいメタフォアだが、それならどうするという最もシイリアスな質問に対して、結局この作品では充分にオリジナルな回答が与えられていないという点が気にかかるのである。

【資料5】 三好達治「蛇足言」（『文学界』一九五〇年一二月号）

谷川俊太郎君は今年高等学校を了へたばかりの白面の書生さんである。先日機があつてその詩稿の一部を見せてもらった。作品は例外なく私にはみな面白かつたからそのうちの数篇を紹介するために、ここに誌面をかりた。谷川君の詩風は簡素平明でことさらな巧みを用ひず、所謂モデルニスムの表面的意匠を藉りたことをしないが、さすがにその歌ひぶりは、ぐんと新らしい。奇を用ひることをしないが、内容のみづみづしい躍動とそれを盛るにふさはしい語感語法の新しさをたしかに彼のものとしてゐる。品のいい自然な機智にも富んでゐて、またそれに溺れることをしない用意にも欠けてゐない。そんな点よりも、しかしながら私は彼のリリースに常に密接に智性の関渉のあるのを喜ぶ。この点が最も新らしい。

【資料6】 匿名「詩壇時評」（『詩学』一九五一年一月号）

ところで、「文学界」が三好治のあとがきをつけて谷川少年の詩を紹介したのは、何かの気紛れかもしれぬが、一応興味のあることだ。この少年は、親父（谷川徹三）ゆづりかもしれないが、ともかく有望な秀才と見えた。かういふ少年がどうのびるものか、またいつまでも変らず詩に執心してゐられるかどうか、それは目下のところわからぬことだが実はここへ少年の名を出したのは、ほかでもないのだ。注意してゐる者なら、すでにこの谷川少年はこの「詩学」の研究会に参じてゐてその作品も出てゐたのだが、このときの作品と「文学界」の作品とが、まるで関係のないやうな別の風格をそれぞれあらはしてゐることに気付かれただらうか。このことを言ひたかつたのだ。いかに才分にめぐまれた少年とは言へ、こんな変貌がさうたやすくありえていいのだらうか。それとも、そんなことが気懸りになると言ふのがともと無意味なことでもあるのだらうか。ただ一人の少年のこと、それほど気にすることはないと言つてしまへばそれ迄だが、ともかくきいてくれたまへ。これは、日本に本当の「詩の伝統」がないからなのだと言ひたいのだ。（中略）いかに少年とは言へ、もし日本の詩に伝統があるならば、少年とは言へさうさう軽々と自己をたやす変化してゆくことは出来なかつたらうと思はれる。

【資料7】村野四郎「新しい予想」〔詩学〕一九五一年二月号)

新しい詩を創造するということには、どんなに隠微なフアクタアが必要であるかということをつくづく思わせられる。それにもか、わらず僕はこゝに何人かの新人の名をあげた。その理由はこれらの新人たちはそれぞれ、各自の実験項目をもっている。そして極めてそれが能率的であるように思われるからにすぎない。友竹、谷川、金井君たちの新しい抒情の扱い方において、山本君のダダ的な現実の新しい掘み方において、北君の不思議な人間の認識の仕方において、和泉君の作像上の新しい方法において、鵜澤君の変つた事物性追求の方法において、福田君の詩の中のメタフィジカルな方向について。

*「詩学」一九五一年二月号の「詩学審査委員会 詩人推薦の言葉」のひとつ。同号にはほかに谷川の略歴が掲載されている。

【資料8】黒田三郎「同人雑誌評」〔詩学〕一九五二年四月号)

谷川俊太郎「埴輪」は単純な詩で、またそのテーマが石像と埴輪というように似たところもあつて、リルケの次に挙げたのではその作品のよさが、目立たなくなるかも知れないが、しかしここには詩をつくる態度の素直さというものがある。誰の詩でも詩に作者の体臭がうつるのには勿論自然であるが、むしろ臭みまけのしたような詩の多い中で、この素直さは貴重である。「埴輪」はこの作者にとつて格別よい詩ではないだろうとは思ふ。ただ僕としてザッハリビな見方を深めてゆくという素直な努力に対して敬意を表したい。

*「歷程」評の一部。「ザッハリビ」＝即物的。

【資料9】高橋宗近「谷川俊太郎詩集『二十億光年の孤独』」〔詩学〕一九五二年八月)

「二十億光年の孤独」は一応楽しく読める詩集だ。然し精しく見れば物足りない点もかなりある。ザハリビなものが見方が新鮮だといつても、谷川君のそれは、読者の思考の表面に軽快なシヨックは与えるけれども、読者の思考の内部にまで浸透して、思考の廻転そのものを交代させるような深さも力も乏しい。そこに才気は充分に感じられるのだけれど、詩としての浸透性とか重感とかいふものをもとなつていないうらみがあるのである。読者の思考に軽快なシヨックを与えるというのものは成功した場合のことで、谷川君として不成功の作品は、ザッハリビな新鮮さをねらいそこねて、単に、思いつきだけが目だち、そういう思いつきによりか、つて持てあまされている谷川君の才気が妙に気になる場合も多いのである。(中略)

総じて言つて谷川君のこの詩集は「年少者の文学」の領域からそれほど出ていないとすら見られる点もある。これは何も谷川君の年齢の若さからあてずばうに言うことではない。たとえば「地球があんまり荒れる日には」とか「二十億光年の孤独」とかいう作品では、谷川君は、人の子としての孤独さから、火星に呼びかけたくなつたり、火星に仲間を欲しがつたりする、ということを書い

ている。その他の作品にも同じような主題はしばしば見られるが、これらは人間の孤独を宇宙的に定着させようとする谷川君の考え方を示している。所が、その谷川君の考えている宇宙のものとはなんであろうか。一読すれば判るとおりきわめて初歩的常識的な天文的宇宙に過ぎないのである。初歩的な天文学の知識によつてえられる少年の宇宙に対する神秘感。なるほどこれは成長しつある年少の一時期にあつては、きわめてエポツメイキングな感情かも知れぬ。しかし、最初は天文学的にえられた宇宙感も、やがては天文学的図形を越えてゆく。

【資料10】鮎川信夫・鳥見迅彦・平林敏彦・木原孝一・嵯峨信之「作品月評」第四回〔詩学〕一九五三年五月号) 嵯峨 表現が柔かになつたね、ソネットの故為もあるが。

二十億光年。よりははずつと……。

木原 だけれど二十億光年。でよく言われた批評の中に新鮮さという言葉があつて、それが大体賞讃された大きな部分になつていなければならない。この詩になるとその新鮮さというかみずみずしさというものがほんとうに自分の身についたというか、もつとオブジェクトないしはまわりにあるものに頼らずに、ちよつとうまい抒情的な方程式を持つていて、その方法で初めから最後までものを言つていっているという点が、二十億光年の孤独とは大分違うのじやないかと思ふのですがね。それがいいか悪いかは……。 (中略)

鳥見 「二十億光年の孤独」という詩集とくらべると、この詩は、だいぶお兄さんになつた感じだな。「二十億光年の孤独」は初々しくて、やさしくて、白と黒がはつきりしている明るさがあつた。あの詩集の作品はだいたい制作順にならべられていて、谷川俊太郎の成長の過程が手にとるようにわかるものだつた。伸びてゆく速さが印象にのこつて、たのしい一冊だつたと思ふ。

(中略)

嵯峨 「ネロ」なんかこれよりもずつと新鮮だな。

鮎川 「ネロ」というのは「二十億光年」のうちで一番いい詩だと思つた。

嵯峨 レトリックなんかも十分納得して書いているね、「ネロ」の方は。こつちはところどころ大分違つていなければならない……。

*「文学界」一九五三年四月号掲載作品の合評。「ソネット」(六十二のソネット)所収の「41(空の青さをみつめていると)」に対する評。谷川以外に、和泉克雄「二月の詩」、中村稔「凧」、菱山修三「波打ち際の」の作品が論評されている。

【資料11】鮎川信夫・鶴岡冬一・鳥見迅彦・長江道太郎・平林敏彦・三好豊一郎・嵯峨信之・木原孝一「新人十人を語る——座談会——」〔詩学〕一九五三年一月号) 鶴岡 イメージをほとんど含まないというか割と素直な叙述で書いた「ネロ」という詩なんか非常にすつきりとしていいる。

鮎川 あれは谷川の作品中でも大分型の違つた作品じやないかな。

嵯峨 「ネロ」以上に印象が残るいい詩というものはな

いでしよう。(中略)

三好 (略)「二十億光年の孤独」にはイメージにもザハリツヒな明確さがあるのですが、このごろの詩は何か気分的ですね。(中略)

嵯峨「埴輪」という詩があるけれども、あの詩は非常にまとまった詩だと思つた。(中略)

長江 この「二十億光年の孤独」の序文を三好さんが書いていたけれども、それを離して考えてみても、ぼくは谷川俊太郎という人はつまり現代の新しい三好好治という感じがするのですよ。(中略)

鮎川「ネロ」というのは谷川俊太郎の場合、どつちかという例外に属するのではないかと気がする。普通谷川の詩といえやはりソネットの詩とか、あるいは四行詩の方が身上じやないかな。(中略)

三好 この「二十億光年の孤独」の詩はイメージが非常に具象的です。「埴輪」でもいいのですが、物象に対する新鮮な感受性があると思うのです。最近の詩は言葉の間をぬつて歩くような面白さに変つていますね。

長江「二十億光年の孤独」以後の方は、詩集の時代に持つていた感覚的な新鮮さ感情のアラバスクというのが下に沈んで来て、鮎川さんの言つてきている意味での詩としての秩序を保つという方に大きな関心が払われているのじやないかという気がする。

木原「二十億光年の孤独」でわれ／＼が新鮮さと言つているものは、実は詩人の初期に持つていた直截な感受性というものがうまく出た場合であつて、今度のソネットのようなメタフィジックな思考の世界というものに踏み込んで行つた場合は、そういう直截的なものが失われるのはひとつの宿命なのだと思います。

嵯峨 ほんとうはそういうメタフィジカルなものが詩としてもっと新鮮に出て来なければおもしろくないのですよ。「埴輪」はあなたが言つた通りザハリツヒなものが、堅実な仕事で書き上げたという感じがする。木原 一般に彼の詩にはザハリツヒと言われる強い即物性というものはないと思いますね。

嵯峨 彼の持つている本質的な問題は一応おきますが、ただ「埴輪」に関する限りはそういう言い方が通りそうなほど物の手ざわりが感じられる。

木原 態度としてでなく一つの方法としてのザハリツヒならわかるけれども、それは決して彼の方法ではないし、彼の支柱になつていなくてもないと思うな。

【資料12】飯島耕一・高橋宗近・谷川俊太郎・大岡信・中村稔・川崎洋・山本太郎・嵯峨信之・木原孝一「二十代の発言——座談会——」(「詩学」一九五四年一月)

川崎 私なんかも詩を書き始めたころ最初に勉強したのは今の四十代、五十代の人たちの詩集ですね。それから「詩学」があるというのを知り、また三十代の人たちの詩集も読んだわけです。そのときほんやりとずいぶん違うなと思つたが、自分の詩をつくるのにいそがしくてあまり三十代の人たちのを読まなかつた。谷川さんの「二十億光年の孤独」が出て、それを読んで何かほつとしたような気がしたので。

【資料13】高橋宗近・壺井繁治・村野四郎・伊藤信吉・平林敏彦・山本太郎・編集部「現代詩の焦点——座談会——」(「詩学」一九五四年九月)

村野 谷川君のものとしては最初の方の詩集がずつといふと思う。存在意識がハッキリとして新鮮だよ。空間と時間に対する感覚が輝くように新鮮だが、『六十二のソネット』は全部ばやけてしまつていいる。

編集部 詩の方法論としてはそれほど新しい方法論ではないが、六十二のソネットは実験的には新しい方法だと思ふ。

村野 レトリックとしては非常にうまくなつていいるね。しかしああいうばやけ方は戦後みんなもつていいる。あれは明確な知覚や論理的確性を失つた、一種の雰囲気だよ。谷川君などいい方だ。

【資料14】大岡信「詩の条件」(「詩学」一九五四年二月)「六十二のソネット」という詩集が第一詩集「二十億光年の孤独」より劣つていいるという一般の見解は、ぼくには全く皮相浅薄な意見としか思えない。『六十二のソネット』を少し注意深く読めば容易にわかるはずなのが、谷川はここでは決して言葉に頼つて書いてはいない。むしろ言葉は乱雑に投げ出されていられるようにみえる。言葉は捨てられていいる。ということは、言葉を捨てても掴み取ったものが彼にはあつたということだ。それがたとえ彼自身の極めて特殊な夢想であろうとも、それは言葉の彫琢を忘れさせるほど強く彼に働きかけてる。(中略)ぼくには、彼の言葉は乱雑に投げ出され、捨てさられていることそのものによつて、己れを超えるものに向つて祈るような姿を獲得し、すでにそのことによつて己れを超えているように思えるのだ。

■詩集出版当時の回顧

【資料15】木下常太郎「解説」(「戦後詩人全集」第一巻、書肆ユリイカ、一九五四年九月)

谷川俊太郎も戦後詩人としては最も若い層にぞくしていいる。彼は処女詩集「二十億光年の孤独」によつて若駒のように戦後詩壇に現れて有名になつた。戦後詩人の多くが何となくすぶつていたのに彼だけは唯一人活々としたあざやかな朝のような光を放つていた。たとえ若くて未熟なところがあるにしてもその知性と感覚が才智にあふれた若駒のようにはねかえつていた。それに詩法も工夫されていた。「ネロ」「二十億光年の孤独」「町」などが佳作であり彼の情熱をよく示していいる。

*『戦後詩人全集』第一巻には中村稔、大岡信、谷川俊太郎、山本太郎、那珂太郎、新藤千恵の各作品が収録。

【資料16】飯島耕一「谷川俊太郎論」(「展望」一九七五年九月号)

谷川俊太郎の存在を知つたのは一九五〇年、「文学界」に彼の「ネロ他五篇」の詩が、三好達治の紹介で掲載されたときだった。当時ぼくは自分でもようやく詩を書くうとしていた矢先で、一年年下の彼のきわめて早い爽やかな登場にはやはり軽いショックを受けた。谷川俊太郎は何度かぼくにショックをあたえた人物だが、このとき

がはじめである。

【資料17】谷川俊太郎・山本太郎・岩田宏・林光・入沢康夫「詩の倫理と文体」〔現代詩手帖〕10月臨時増刊「谷川俊太郎」一九七五年一〇月

入沢 ぼくは谷川さんの詩は『二十億光年の孤独』が詩集になってから初めて読んだんです。ぼくはあの頃は文芸雑誌なんてあんまり読んでなかったしね。とにかく、そのときの印象は、詩がこんなふうには自律性と受性の正直なバランスの上に書けるということ、しかも一つの本というかたちで存在を主張し得るということがとてもうれしかった。それまで読んだ戦後詩の場合、世間で評判の詩でも、ぼくのそのときの感じではなんだかつまらない詩ばかりで、いっこうに刺戟にならなかった。あの詩集を読んだ頃から、やっと自分でも書きためたものを詩集にしてみようという勇氣が出てきたことはたしかにあったな。先人観なしに詩集を読んだのだから、谷川さんが幾つの人なのか、どんな人なのか、全く知らなかった。若い人だということぐらいいしかな。

【資料18】友竹辰「遁れよう嫌おうとして——「秘密とレントゲン」二（同右）

こっちはポツンと広島の田舎町に居て、唯々空恐ろしいような思いで毎月の詩字のページをめくっていた。

その中でも、先ず、谷川俊太郎と言う、何ともかとも言いようの無い、こしらえた名前としては市川団十郎にも負けないような、詩人らしくて賢らしい名前、レントゲンとか赤ラムプ、ルンゲ、インタクト、また唯物的、通訳、高圧電気、磁力、特殊組成などぼくの詩には絶対に現れないような語彙でもって、鮮やかといわんかげぞやかといおうか、そして止めの一句が「病院では肉体の秘密がない／そのため精神はますます多くを秘密にする」などと言う、よほど良く練られた古典落語のオチだった。こっぴんシツとはさまるまいという、その訝え。(中略)する内、三好達治のどの他の詩よりも結構な「この若者は／意外に遠くからやってきた／ああこの若者は／冬のさなかに永らく待たれたものとして／突忽とはるかな国からやってきた」という序詩つきの、つまり「諸君、天才だ、脱帽しよう」という勲章をぶらさげて、颯爽と言おうか突如と言おうか『二十億光年の孤独』が登場、当然の事乍ら、矢庭に天才詩人、若き大詩人のスタンブがペタリと貼られた、ような気分になったものだ、こっちは。

【資料19】大岡信・三浦雅士・佐々木幹郎「世界」の謎を解く想像力」〔現代詩読本特装版 谷川俊太郎のコスモロジー〕思潮社、一九八八年七月

大岡 (略) 顧みれば本当に古いことで、谷川ははたちの頃には戦後詩の新しきスターだったわけですね。「文学界」に最初に詩を出したのは一九五〇年、十九歳の時です。僕も彼と同じ年の生まれで、ただし学年は僕の方が一級上になるわけです。「文学界」に「ネロ」やその他の詩が発表された時、年齢を知ってちよっとしたショックを受けましたね。こんなに若くて「文学

界」のような華麗な雑誌に詩を出しているやつがいる。僕などが仰ぎ見ていた三好達治の推薦によるということだけれど、何よりもその詩が同年配の詩を書く青年にとっては考えられない位、既に一言葉によけない垢がついてないっていいですか、実に切れ味のいい言葉で書かれている。(中略) 谷川の詩を初めて読んだ時には、従来の七五調とか五七調もっている、感覚的な表現でいえばじつとりと湿っているような部分を、はじめから持っていない詩が現れたと感じました。その点が僕には驚異だったわけですね。

■詩集出版当時の今日的なイメージ

【資料20】野村喜和夫「かなしみ」〔現代詩の鑑賞101〕新書館、一九九八年二月

谷川俊太郎の第一詩集『二十億光年の孤独』(一九五二年)は、戦後現代詩の最初の方向変換を告げる事件であった。なかでもこの「かなしみ」は、たった六行という短い詩だが、戦後詩への谷川俊太郎の登場を決定づけるには十分な意味を持つ、名高い作品である。

【資料21】大塚常樹「谷川俊太郎」〔展望 現代の詩歌 第四巻、明治書院、二〇〇七年八月〕

谷川の可能性に満ちた爽やかさは、谷川の詩の世界が、自己肯定とそれゆえに世界を愛することを基調としてもっていることを証明しているだろう。敗戦による喪失感に満ちあふれた重苦しい戦後詩壇に、このようにフットワークの軽いそして可能に満ちた谷川の出現が、如何に衝撃的であったか想像できるだろう。

【資料22】中桐雅夫「二十億光年の孤独(谷川俊太郎)」〔国文学 解釈と鑑賞〕一九六六年一月号

本誌編集部注文は「この詩集が作者自身および当時の詩壇に与えた影響、さらには日本文学の詩の分野における史的意義」を説き、というのだが、この文章の冒頭で留保したように、私には、この詩集がそれほど大上段にふりかぶるべきのかどうか、判断がつかないのである。現在の段階で、私が推す詩集をあげるとすれば、むしろ「愛について」(三十年刊)か、それ以後の詩集をとりたい。また「二十億光年の孤独」が当時の詩壇に影響を与えたとも思わない。この詩集が出版された二十七年の「詩学」八月号で、高橋宗近が書評して次のように述べているのは、当時の詩壇の一般的な受取り方をよく現わしていると思う。

【資料23】野村喜和夫・城戸朱理・藤井貞和「討議 夢みられた「ラング」」〔討議戦後詩——詩のルネッサンスへ〕思潮社、一九九七年一月

野村 (略) 僕のレポートでは五〇年代、六〇年代の谷川俊太郎、つまり『二十億光年の孤独』から『旅』あたりまでの何冊かの青年期の作品ですが、それをわりと短めに扱っているんです。当時、『二十億光年の孤独』や『六十二のソネット』がどれくらいインパクトがあったのか歴史的に知らないわけではないのですが、いま読んでみてちよっとインパクトがないんですね。

■「二十億光年の孤独」構成

昭和二十七年六月二〇日発行。A5判変型。角背上製本。ジャケット付。全一六四ページ。定価一八〇円。三好達治「はるかな国から——序にかへて」、詩四七篇「山荘だより」1〜4をそれぞれ独立した詩と考えれば五〇篇、「あとがき」より構成。「あとがき」によると、「一九四九年冬から一九五一年春頃までの作品から選んだ」詩篇を収録しており、「配列はほぼつくつた順である」（ただし、すべての作品が制作順に配列されているわけではない）。

■「宇宙的」な詩集としての「二十億光年の孤独」

【資料24】北川透「詩はどこから始まるか——谷川俊太郎の初期、あるいは資質の世界」（『谷川俊太郎の世界』思潮社、二〇〇五年四月）

わたしがこの懐かしい「鉄腕アトム」の歌詞から思い起すのは、最初の詩集『二十億光年の孤独』です。この第一詩集が出版されたのは一九五二年でした。ここには一九四九年（十八歳）から一九五一年（二十歳）までの、谷川さんの初期作品から選んだものが収められています。「鉄腕アトム」の歌詞が書かれたのは、それから十数年後になりますが、最初の詩集の中に流れている、ある特徴と通い合うものがあります。それは一口で言うと、孤独な少年の宇宙的感受というふうなものです。なぜ、孤独なのか、なぜ、宇宙感受なのか。ここには谷川さんの詩がどこから始まったのかを解く、大事な鍵の一つがあるように思えてなりません。

【資料25】 同右

宇宙感受を明瞭な形で映し出している作品は、詩集『二十億光年の孤独』では「祈り」「かなしみ」「地球があんまり荒れる日には」「警告を信ずるうた」「周囲」「夜」「はる」「博物館」「二十億光年の孤独」「五月の無智な街で」「埴輪」など多数にのほります。『十八歳』では「I could……」「抱負」「しずかな譚詩」「おそれ」など、「二十億光年の孤独 拾遺」では「常に」「天使は」「二篇だけです。これは『二十億光年の孤独』という詩集の編み方のなかに、宇宙感受の作品を選ぶという、はっきりした自覚が働いている、ということではないでしょうか。詩集の題名の選択ということも含めて、当時、編集段階でそういう自覚が可能になるためには、制作過程のなかで、次第に宇宙が強烈に意識されていったということがある、と思われます。それらのなかでも「かなしみ」は、宇宙を資質の奥深くに抱きかかえた記念碑的な作品でした。

*たしかに「宇宙的」。『二十億光年の孤独』所収の「かなしみ」も、ひとことも宇宙に関連する語が使われていないが、やはり「宇宙的」。「はる」も同様。

【資料26】大岡信「かなしみ 鑑賞」（『日本名詩集成』学燈社、一九九六年十一月）

自分はあるいは、地球とよばれるこの宇宙の片隅の渺たる惑星へ置き去りにされた、別の天体のみなし児ではないのか、とでも言いたげな孤独が、この詩全体を覆って

いる「かなしみ」の源泉である。少年にある時期不意に訪れることのある、空間の「遠さ」に取り囲まれた孤独感と言ってもいいだろう。

*もともと、「文学界」一九五〇年二月号に発表された詩篇（「ネロ」「地球があんまり荒れる日には」「演奏」「病院」「博物館」「二十億光年の孤独」）のほとんどが「宇宙的」だった。

【資料27】北川透「詩はどこから始まるか——谷川俊太郎の初期、あるいは資質の世界」

「ネロ」と「二十億光年の孤独」は、宇宙感受という点では異質な作品のように見えますが、他者や生活の感じられない孤独の深さを表現のモチーフにしていることでは、メダルの裏表のように共通しています。

*だが、「二十億光年の孤独」という詩集全体をみたととき、「宇宙的」である印象が薄れてしまう。実際、同時代評でも「宇宙的」なことを指摘したものは少ない。

*では、どうして『二十億光年の孤独』は「宇宙的」といわれるようになったか。

*仮説

- ①谷川自身の発言の影響
- ②大岡信の言説の影響
- ③詩集タイトルおよび表題作のイメージの影響
- ④テキストの影響

■仮説①②について

【資料28】谷川俊太郎「詩人とコスモス」（『世界へー』弘文堂、一九五九年一〇月。初出『私はこうして詩をつくる』一九五五年八月）

なぜあなたは詩をつくるか、という問は、詩人、楽しみに詩をつくる人ではなく、自分の人間としての仕事として詩をつくることを選んだ本当の詩人にとっては、なぜあなたは生きているのか、という問と変らないとほくは思う。（中略）

つくりたい、という気持は、詩人の情熱なのだ。そして、つくらねばならぬ、という気持は、詩人の広い意味でいって道徳である。前者は詩人の宇宙的な生命のあらわれであり、後者は詩人の社会的な人間のあらわれであると考えていいとほくは思う。一つの詩は、作者の意識的であるなしかかわらず、つくりたい、に出發して、つくらねばならぬ、を通過して感性へと導かれるものだとほくは考える。

【資料29】谷川俊太郎「世界へー」（『世界へー』。初出「ユリイカ」一九五六年一〇月）

科学者たちが新しい宇宙船を世界に向けて出發させる時、詩人は新しい言葉を世界に向けて出發させる。宇宙の沈黙の中で、それらは同じひとつの武器、人間を生き続けさせるための武器なのだ。

【資料30】大岡信「解説」（『空の青さをみつめていると谷川俊太郎詩集1』角川文庫、一九九三年一月改版。初版一九六八年二月）

谷川の詩にも感傷性がないとはいえないが、『二十億光年の孤独』の中の、短いがいつまでも記憶にのこる佳

品「かなしみ」にあらわれているような感傷は（中略）いわば、自分はひよつとしたら、地球という小さな惑星へ置き去りにされた別の天体のみなし児ではないのか、というような、少年にある時期訪れるあのふしぎな遠さにみちた孤独感といったものにちかい。（中略）「孤独」といっても、それは身近な人間同士のあいだで生じる苦悩、迷い、悔恨、愛への渇きにみちた孤独ではない。宇宙の広漠たるひろがりの中に浮かんている地球という天体、その上で愛しあったり戦争したりして、石器時代から今にいたるまで、とにかく繁殖をつづけてきた人類という種の、時あつてふと気づく、種全体としての孤独というようなもの、それが谷川の初期の詩の根本的なモチーフのひとつである。二十億光年の孤独という言葉の意味も、単に少年期から青年期にうつりつつある谷川俊太郎個人の孤独ということではなからう。むしろ地球人なるものが、この二十億光年のひろがりをもつ大宇宙の片隅で、時おり感じとる、人類的な孤独感をさしているだろう。

【資料31】藤本寿彦「谷川俊太郎論——詩集『二十億光年の孤独』に組み込まれた初期詩篇の世界——」（『総合研究所所報』二〇〇七年三月）

今日の現代詩研究からのアプローチは概ね、大岡らが構築した枠組に依拠してきた。その枠組とは次のようなものである。（中略）

引用文は『谷川俊太郎詩集』に掲載された大岡信の「解説」である。

この中で、大岡は「一九五〇年代の詩人たちの特質」という章を立てて、谷川や自分の世代について言及している。「この時代の一群の詩人たちは、感受性そのものを、手段であると同時に目的とする詩、言いかえると、言葉の世界への一層深い潜入ということが詩の目的そのものでありうることを、彼らの詩そのものによって語っているような、そんな詩を書きつづけてきた」と——。

このコンテキストに登場した谷川の詩的世界や詩法に言及した「宇宙」と「感受性」が、批判や検討を経ることなく今日も流通している。

*大岡の谷川観が形成されたのは、いつ？

【資料32】飯島耕一・高橋宗近・谷川俊太郎・大岡信・中村稔・川崎洋・山本太郎・嵯峨信之・木原孝一「二十代の発言——座談会——」（『詩学』一九五四年一月）

谷川（略）今飯島さんが自分たちはモラルを背負っているとおつしやつたけれども、ほくもやはりモラルを背負っているわけで、その違いというものは何か方法だけが違うという感じがするのですが。

飯島 多くの場合は想像力の訓練で書いているような詩が一番いやなんです。そういう意味で、今考えているのは一つの言葉に社会的な意味の広がりを与えようというのをねらっているわけです。

谷川 多くのモラルというのは社会的というのではないのですね。もつと自分では宇宙的なものという感じがするのですけれども、そう言ううちよつと俗っぽくなりますが、人間に対する自分の位置よりも宇宙に対する

自分の位置、そういう意味のモラルで、対社会的にモラルを考えている人たちには多くの詩にはモラルがないように見えることもずいぶんあるのじやないかと思うのです。（中略）

中村 宇宙的にモラルを考えるとすることは多くには理解できないのですが。

大岡 感覚的なんじやないかな、その点。

【資料33】同右

谷川（略）多くの場合非常に痛切にどう生きるかということなんですよ。ほくは何か徹底的に疑っているようなところがあると思うのです。自分の生きている社会も疑っているところがあるし、地球なんかも疑っている。結局自分はどう生きるかということの基盤どこに置くかということがいつでも宇宙的な広がりを持つていようような気がするので。だから地球なんていうものも何億年、何千億年存在するものであるにせよ、いつかは滅びるものであるとか、ほくらは人間になつていけるけれども、非常に遠い昔には生物ではなく非生物から進化してきたものだというようなこと、そういうこと自身が今お茶を飲んでいるとか、隣りの人が病気で死にかかっているとか、戦争があるとかがいうことと同じ強さでぼくには問題になるわけです。（中略）

川崎 この間私が谷川さんからいただいた手紙に、メタフィジックなものに対する野心という言葉がありましたけれども、それとこれはどんな関係になるわけですか。

谷川 みんながぼくのことを抒情的だと言うのに対して不満に思うのです。ぼくはどう生きるかということについて考えていることがそれだけで自分にはメタフィジックだと思われるものだから、そういうものがまだ抒情的だと受取られるのはぼくの方法のまずさとか、そういうことにあるのじやないかと思つて、そういうことは矯正したいと思つたのでけれどもね。（中略）

大岡 今、抒情的であるというのは不満だと言われたのですが、やはりそういうふうな宇宙的なものも隣りの人の事件も同質に見えるというのは、メタフィジックではなく抒情的だと思うのですよ。だからそれを問題にするならやはりそこに非常に大きなシステムみたいなものをつくらなければならぬ。（中略）言いかえれば遠いものを遠く見ていないということになるわけですね。つまり遠いものも近くに見えるということとは、遠く見えるものと近くに見えるものとの質の差を認めていないということになるわけです。だからまた非常に歌に近いのじやないですか。そういう意味ではメタフィジックとは非常に対立しているのじやないかと思えます。

■仮説③④について

*詩集から選集などへの採録作品数が少なくなればなるほど、「宇宙的」な作品の占める割合が高くなる？

*『二十億光年の孤独』中、宇宙関連語が使われている詩の割合。五〇篇中、二三篇。四六パーセント。「か

なしみ」「はる」を加えると二五篇、五〇パーセント。

■アンソロジーや選集への採用詩篇（★は宇宙関連語を含むもの、☆は「かなしみ」「はる」）

▽『戦後詩人全集』第一巻（書肆ユリイカ、一九五四年九月） 17篇／★9篇☆1篇

「生長」☆かなしみ「一本のこうもり傘」灰色の舞台
「★博物館」★二十億光年の孤独「梅雨」ネロ「★演奏」メス「★暗い翼」★山荘だより1「山荘だより2」★山荘だより3「★山荘だより4」★埴輪「★初夏」

▽『空の青さをみつめていると 谷川俊太郎詩集1』（角川文庫、一九九三年一月改版。初版一九六八年二月） 20篇／★11篇☆2篇

「生長」★運命について「絵」「春」★祈り「☆かなしみ」★西暦一九五〇年 三月「郷愁」宿題「★周囲」☆はる「★博物館」★二十億光年の孤独「★五月の無智な街で」梅雨「ネロ」★暗い翼「★山荘だより 3」★埴輪「★初夏」

▽『続続・谷川俊太郎詩集』（現代詩文庫、一九九七年七月） 12篇／★6篇☆1篇

「生長」★わたくしは「★霧雨」☆かなしみ「★地球があんまり荒れる日には」電車での素朴な演説「郷愁」★夜「和音」灰色の舞台「★二十億光年の孤独」★それらはすべて僕の病気かもしれない

▽『谷川俊太郎詩集』（ハルキ文庫、一九九八年六月） 4篇／★1篇☆2篇

「☆かなしみ」「☆はる」★二十億光年の孤独「ネロ」
▽『谷川俊太郎詩選集』1（集英社文庫、二〇〇五年六月） 8篇／★4篇☆2篇

「春」☆かなしみ「☆はる」★博物館「★二十億光年の孤独」ネロ「★暗い翼」★埴輪

▽『自選 谷川俊太郎詩集』（岩波文庫、二〇一三年一月） 4篇／★2篇☆1篇

「☆かなしみ」★二十億光年の孤独「ネロ」★一九五一年一月

*右のすべてに収録されているのは「かなしみ」「二十億光年の孤独」。『続続・谷川俊太郎詩集』には「ネロ」非収録。

*もちろん、宇宙関連語が使われていない「宇宙的」な作品があるように、宇宙関連語が使われていても「宇宙的」でない作品もあり、単純に数では判断できない。
*ノートではどうだったか。

■『二十億光年の孤独』拾遺詩篇

▽『二十億光年の孤独 拾遺』（日本の詩集17 谷川俊太郎詩集）角川書店、一九七二年四月）

全二二篇収録。このうち、「(想う人と動く人)についてのノート」はノートに記されておらず、「詩学」一九五二年一月号に発表されたもの。

※小海永二「解説」（『日本の詩集17 谷川俊太郎詩集』）少年谷川俊太郎は、このような詩をせっせと書いては、

ノートにきちんと清書し（それらはノート三冊分になった）、時至るや、その中から選んで詩集『二十億光年の孤独』を編んだのだった。

それでは、選び残された詩はどうなったか。本詩集の〈二十億光年の孤独 拾遺〉に収められている詩が、そのおり選び残された中から今回さらに選ばれて、はじめて読者の前に差し出されることになった諸編である。これらの詩は、谷川俊太郎の詩を、特にその最も初期の詩を愛する読者にとっては、この上ない贈り物と言えるだろう。

▽『十八歳』（東京書籍、一九九三年四月）

沢野ひとしの挿画とともに、全六三篇が収録。このうち、「夢」は「二十億光年の孤独 拾遺」と重複。すべての詩はノート「傲慢ナル略歴Ⅰ」「電車での素朴な演説Ⅱ」の二冊から採録されており、「無題」からは採録されていない。

※谷川俊太郎「あとがき」

手元に二冊のうすつべらなノートブックが残っています。一冊は「傲慢ナル略歴」と題され、もう一冊は「電車での素朴な演説」と題されています。この二冊が私の詩への出発点でした。（中略）

その二冊のノートの中から、『二十億光年の孤独』（中略）に収めたものを除いた大部分を、この詩集に収録しました。沢野ひとしさんが絵を描いて下さらなかつたら、私にはこれらの作品を人目にさらす勇氣は出なかつたでしょう。

▽伊藤眞一郎・橋本典子編『翻刻』谷川俊太郎『二十億光年の孤独』に関わる初期詩篇ノート（安田女子大学言語文化研究所、二〇〇三年三月）

ノート「傲慢ナル略歴Ⅰ」「電車での素朴な演説Ⅱ」「無題」を翻刻し、解説等を付したものの。「傲慢ナル略歴Ⅰ」は一九四九年一月二日～一九五〇年三月四日制作の詩、計五九篇を収録。「電車での素朴な演説Ⅱ」は一九五〇年三月六日～同年五月三日制作の詩、計五四篇を収録。「無題」は一九五〇年五月八日から一九五二年二月二三日制作の詩、計八二篇を収録。

※伊藤眞一郎・橋本典子「まえがき」

『詩集二十億光年の孤独』に関わる初期詩篇ノートについては、谷川俊太郎氏自身が、早くに二冊のノートという呼び方でその存在を明かし、ノート自体もその一部は写真で一再ならず紹介されてきた。したがって、私たちは長年文字通りに二冊のノートと了解してきたのだが、今回の提供によって、それが実際には三冊であることを知った。三冊中、順序からすれば三冊目に当たるノートが無題であることから、表題の付された前二冊に即して二冊のノートと呼ばれていたかとも推されるが、これは小さからぬ驚きであった。

■ノートについて

*ノート三冊中、宇宙関連語が使われている詩の割合、一九七篇中、六一篇。三一パーセント。

*ノート↓詩集↓選集類、と「宇宙」的な作品の割合が

増えていく『二十億光年の孤独』。

*ノートから詩集への収録作品はどのように選ばれたか？

【資料34】谷川俊太郎・四元康祐「二十億光年の孤独」からはじめて「現代詩手帖」二〇〇七年八月号

四元（略）『二十億光年の孤独』を編まれたのは、お父さんのアドバイスがだいぶ入ってるんでしようか。○とか×とか書いて戻ってきたんでしょ。

谷川 だいぶ入ってると思いますね。それがはつきりしているものもあります。彼、遠慮してすくく薄く（ノートに）書いてんですよね。たとえば「停留所」は二重丸で「夜の雨の町」が一重丸で——（中略）

四元「なごやかなころの魅力に／ふとほくは夏を思った」。これは不要と。

谷川 これ徹三さんの意見を聞いて、削ってますね。

四元 聞き分けのいい息子さんだったんですね。

谷川 というより、彼、文芸時評をやった人だから。自分も詩を書いてたし。

四元 納得なさったんだ。じゃあ二重丸だけ採ったんですか。

谷川 いやいや、そんなことない（笑）。そんなに彼の選んだものだけじゃなくて、自分の気持ちと、それから出版社の編集者の意見も入ってたかもしれない。

四元 三好達治さんのご意見は？

谷川 入ってません。三好達治さんは「文学界」に出すものを選んでくれただけだったと思う。これを一番最初に出してくれようとしたのは雲井書店という出版社で、その雲井さんとはどれを入れるかって話し合った可能性ががありますね、よく覚えてないけど。

【資料35】谷川徹三「息子俊太郎を語る」（現代詩手帖）10月臨時増刊「谷川俊太郎」一九七五年一〇月

谷川（略）近所に淀野隆三の家があつてそこへ三好さん居候してて、それで二人でよくやってきたんです。そんな関係で、三好さんに一つ判定してもらおうと、原稿をもつていった。たくさんのなかからわたしがいいと思うものを、それでも何十か選んで、分量から言々と全体の半分くらいになるかしら、それを持って行った。三好さんは丁度留守でしたが、翌朝早く、わたしのところへやってきて、「非常にいい、詩ってこういうもんですよ」と言う。わたしも少し安心して「それだったら、自分の好きなことをしろ」ということになった。（中略）そして、恐らくその年に三好さんが、「文学界」に紹介してくれて、その翌々年くらいに『二十億光年の孤独』が出るようになったんです。

【資料36】「二十億光年の孤独」に関わる初期詩篇ノートの「解題」（伊藤眞一郎・橋本典子編「翻刻」谷川俊太郎『二十億光年の孤独』に関わる初期詩篇ノート）

大半の詩篇の題名の上方または右肩、および右野外の下方余白には、◎・○・▽等の記号類が付されている。これらは、大半が薄く書き込まれていて、著者によると、この記入者は、父徹三氏と著者自身のものだという。この記号類を見ていくと、記号類が薄く見えるものが

ある。それらは父谷川徹三氏が付したものを、著者が一度消しゴムで消したからだという。また、その薄い記号類の横などには、濃い「○」印や「○」の上に「×」の印が付されている。これは、著者自身によるものであるという。他にも、左の野外には「歷程詩集」「詩学」などの書き込みもある。これらは、著者自身のもので、それぞれを雑誌に投稿しようと思いついたということだが、詳細はよく覚えていないとのことである。

他に、詩篇本文に関するメモ、および感想類などの書き込みもある。これは、父谷川徹三氏のものだということである。

■詩集の編集意図

【資料37】谷川俊太郎・四元康祐「二十億光年の孤独」からはじめて

四元（略）『二十億光年の孤独』が非常に斬新だったのは、声のあり方。私性というものが、十八歳の少年が書いたにもかかわらず、見事に払拭されているところでしょう。等身大の「私」がほとんど見られない、という印象をもちました。（中略）『二十億光年の孤独』と同時期に並行して書かれたにもかかわらず、そこには採用されなかった詩が、『十八歳』という詩集に収録されていますね。刊行されるまで四十年ほどずっと封印されていた。

谷川 封印でもないんだけどさ（笑）。これはあく自身が望んだ本じゃないんですよ。イラストレーターの沢野ひとしが、東京書籍に持ち込んで、これを出そうよって。ほくは気が進まなかったの。だって『二十億光年の孤独』のとき落としたんだから、駄作だと思ってるわけでしょう。

四元 『十八歳』を読んでほくが強く感じるの、出来がいい悪いということよりも、肉声で書かれている詩であるということ。等身大の谷川さん、生身の谷川さんがここにはいるような気がする。それを二十歳の谷川さんは、生理的な判断かもしれないけれども、見事に抹殺してしまったわけですね。

谷川 それはきつと生理的な判断ですね。この詩はよくないと思ったのは、私性が強く出たんでしよう。たぶん意識的ではなかったと思うけど、きつとその頃から私性を出しちゃいけないと思ってたのかもね。

*『十八歳』に谷川の編集意図は働いていない。『二十億光年の孤独』の編集意図を探るには『十八歳』や「拾遺」ではなく、三冊のノートとの比較のなかで考えることが必要。

*ノートへの書き込みは何を意味するか。ノート現物を確認する必要性。

*詩集編集には、多少なりとも父の意識が働いているのはたしかだろう。父による最初の選別が谷川に与えた影響があるのではないか。宮沢賢治の研究者でもあった谷川徹三。ノート「電車での素朴な演説Ⅱ」の最終ページにも、賢治「銀河鉄道の夜」の一節が描かれている。

*北川透がいうように、「『二十億光年の孤独』という詩集の編み方のなかに、宇宙感覚の作品を選ぶという、はっきりした自覚が働いている」のだとすれば、「文学界」掲載の際の三好達治の選が影響していないだろうか。

*谷川徹三や三好達治の眼が通ることによって、「宇宙」というテーマが発見された可能性。

■詩集非収録のノート詩篇

*「傲慢ナル略歴Ⅰ」一四篇／全五九篇。「電車での素朴な演説Ⅱ」四篇／全五九篇。「無題」四五篇／全八二篇。

*いずれにも収録されなかったのは、詩としての出来栄えの問題？（ちなみに「無題」から『十八歳』に採録された作品はひとつもなご。）

*ノートと『二十億光年の孤独』の異同。大きな異同はほとんどなし。大きなものは以下の三点。

①「郷愁」の副題「グリーク・ソナタ Op.45 第二楽章」が詩集収録時に削除。

②「現代のお三時」第二連最終行に記されていた「(肩をすくめ詩を急ぐのか)」という一行が詩集収録時に削除。

③「一九五一年一月」のエピグラフ「War. n. a contest between states carried on by arms. (Chambers's 20th Century Dictionary)」が詩集収録時に削除。

*③について。消される「戦争」の痕跡。

*詩集非収録詩篇に「戦争について——ひとつのヴィジョン——」あり。制作日付一九五〇年七月五日。

広い

さびしい

砂漠の頂点で

二匹の真白い蝶が

二匹の弱い蝶が

傷つきながら闘っていた

広い

広い

茶色の

砂漠の上に

その時緑はなかった

もう青空もなかった

ただ闘っている二匹の蝶の後に

ひとつのあをざめた 能面が歪んでいるのを僕はみた

二匹の蝶はやがて汚れ

いつか風に吹き散らされてしまった

だが

広い

広い

さびしい

砂漠の頂点に

あをざめた能面が

なほ ただひとつ残っているのを僕は知っている

75

*一九五〇年六月二五日、朝鮮戦争勃発。

*詩集非収録詩篇「碑銘」(制作日付一九五一年六月)。

骨は白い

骨は簡素だ

まるであの大きな法則のように

そして その法則を求める心のように

死んだ人人は今どうしているだろう

華やかな宮廷の音楽に送られ

或はひとりの嗚咽や激しい銃声に送られ

しかし 同じように去っていった人人は

ひとつの夢から他の夢へと人人は去ってゆく

そして ひとときの碑を人人は残す

誰かの意志の凶案のようなあの揃いの碑を

あの白い簡素な制服のような碑を

はてない初夏の空の下で

僕は今日も碑銘を探す

それらの不思議な表情の上に

一体どんな言葉が正しいのだろう

6

【資料38】藤本寿彦「谷川俊太郎論——詩集『二十億光年の孤独』に組み込まれた初期詩篇の世界——」

谷川が戦争体験と無縁の表現者であるというのが常識のようになっていくわけであるが、果たしてそうであったのか。その常識は昭和二十七年刊行の『二十億光年の孤独』の読解によって形成されたものだが、この詩集のコンセプト自体が当代における谷川のセルフイメージ戦略と深く関わるものであったかもしれないのだ。(中略)

この詩的世界の語り手「僕」は、十五年戦争で戦没した兵士達の墓が林立する中をさまざましている。その時、「僕」は直感的に初夏の日差しに輝く墓を、兵士の身体として読み解くのだ。(中略)

この世界の枠組は訪れた墓地に対する「僕」の読み取りに外ならない。兵士の死は生前はいくまでもなく、死後においても、「大きな法則」の美によって秩序づけられている。そのように、「法則」を自分と関わりぬ外在律として視覚化し得る位置に「僕」は存在しているのだ。この位置から、兵士個々へと想像を巡らせ、「宮廷の音楽に送られ／ひとりの嗚咽や激しい銃声に送られ」て死んでいったことを思い描くのだが、ここでコンテクストは逆のベクトルを辿る。「しかし 同じように」と――。

こうして「僕」は国家が市民に仕掛けた死を巡る共同幻想を掴み出すのである。そして、白骨として露出している共同幻想に「不思議な表情」を読み取りつつ、これに刻むべき「言葉が正しい」「碑銘」を探求する、こののだ。

谷川が詩人たり得る資格を有しているのは、戦争体験を正しく言語の問題として設定したことに求められよう。

*しかしノートの語り手にとって、戦争は「お伽話」でしかない。「また やがて 当然のように ゆっくりした戦争があった。白い墓がいつのまにか増えていった」(「町へお伽話 6」)、「裏通りではりんごのように雄弁家が戦争を語っていた。やがて奇妙な沈黙が彼をも殺した」(「都市へお伽話 7」)。

*「戦争体験を正しく言語の問題として設定した」と捉えるか、それとも戦争を言語の問題としてしか設定しえなかったと考えるか。おそらく両方。

【資料39】谷川俊太郎「十代のノートから」(「ONCE」集英社文庫、一九九六年一月)

March 28.

表面的に戦争否定をうたっていてよいものかどうか。

June 12.

僕にとつて結局最も大切なことは、僕が生きているために生きているということだ。僕が生きている。しかも僕だけが生きている。他の誰とも一緒にではない。そして僕は生きるために生きている。僕の勉強、僕の詩、僕の実行、すべて僕が生きているということを終局の目的とすべきである。しかも僕は正しく生きねばならない。(中略)

あるものは国や人種ではない。あるものは人間と土地である。

我々のうしろに絶えず地球をそして全人類を意識して生きる。ある場合には宇宙を意識せねばならない。郷土愛は認めるけれども愛国心はもう認めたくない。人類愛、地球に対する愛がそれに代るべきだ。

*一九五〇年の記述。

【資料40】北川透「詩はどこから始まるか——谷川俊太郎の初期、あるいは資質の世界」

『二十億光年の孤独』や『十八歳』に収められた詩篇が書かれた一九四九年から五一年までの時期は、まだ、太平洋戦争の記憶も生々しく、戦後の社会的混乱も収まっていない時期です。一九五〇年六月に起こった朝鮮戦争もほぼ三年間続きます。人々は飢餓や死の体験、第三次世界大戦の予感のなかで、階級とか革命とか民族独立とかの重苦しい政治や思想のことに支配されています。そこにそうした現実を根底をもたないような明るく、軽いひびきを感じさせる、あの(ネリリ、キルル、ハララ)の火星語(『二十億光年の孤独』)や、『メゾンラフィットの夏』/淀の夏/ウイリアムスバーグ橋の夏/オランの夏(『ネロ』)などに象徴される谷川さんの詩

のことが出てきたのでした。これらのことばのひびきが新鮮だったのは、体験だとか、イデオロギーとか思想とかの戦後詩の枠組みや意味を無化するような働きを、それがしたからではないでしょうか。むしろ、これまでの詩の歴史や戦後詩のシーンに、こうした透明な宇宙感覚や乾いた季節感の浸透したことが登場することもなかったのです。それが戦後詩の読者を越えた、あるいはそれとは別の広い読者に、谷川さんが支持された理由でしょう。

しかし、それは同時に戦後の現代詩の中での谷川さんの孤立を意味しました。戦争体験や戦後社会との格闘のなかにこそ、戦後詩は表現の根拠を見出していたからです。

【資料41】小海永二「解説」『日本の詩集17 谷川俊太郎詩集』

『二十億光年の孤独』が出版された昭和二十七年(一九五二)という年は、年譜を繰ってみればわかるように、朝鮮半島にまだ戦乱が続く、国内では、破壊活動防止法案が国会に上程されて大きな政治的争点となり、今日まで長期裁判の続いている血のメーデー事件が起こった年である。この年の七月には、東京の新宿駅前で二千人のデモ隊と警官隊とが衝突して、はじめて火炎びんと催涙弾との応酬が行なわれている。詩壇的に言うと、この年は、当時詩壇の主流をなしていた『荒地』グループに対抗して、左翼系の詩人たちが大同団結を図り、詩誌『列島』を創刊した年でもあった。そして、その当時の詩壇の詩は、不安と激動の時代を反映して総じて暗く、『荒地』の詩にせよ、『列島』の詩にせよ、ともに重苦しい苦悩の色調を帯びていた。

谷川俊太郎の『二十億光年の孤独』が現われたのはそのような時代であって、小気味よいまでに社会の現実からすっぱりと切れ、当時の多くの詩とまったく異質であったことが、かえってさわやかな印象を与えたのであった。それは、鬱屈しきった気圧の中に新鮮な涼風を吹き込む一つの詩的事件であった。

*右のふたつの指摘はその通りであると思われる。ただ、もつと広く当時の詩の置かれていた状況を考える必要があるかもしれない。一九五三年、総合誌の相次ぐ現代詩特集。そして、このころ「詩は難解だ」ということがしきりにいわれる。詩だけに収まらないその後の谷川の活動を考えると、同時代の詩との関係ばかりでなく、いわゆる文壇や世間との関わりも考慮して谷川の詩を考えていく必要があるのではないか。

【資料A】 『二十億光年の孤独』 詩集本文・ノート本文 用例

※ノートA = 「傲慢ナル略歴Ⅰ」、ノートB = 「電車での素朴な演説Ⅱ」、ノートC = 「無題」

※詩集番号の数字は『二十億光年の孤独』の収録順序、×は「拾遺」 『十八歳』 いずれにも非収録。

ノート番号	詩集番号	タイトル	宇宙	火星	地球	太陽	月	星	光年	その他	宇宙語	戦争	原子	水爆	兵	銃	その他
A01		まなび															
A02		雲															
A03		ある世界			地球						○						
A04		日日															
A05		朝				太陽					○						
A06		路傍夕暮															
A07		雲					月	星			○						
A08	×	灯ともし頃															
A09		橋															
A10		今日のころは															
A11		午後おそく															
A12		天の断片															
A13		秋															
A14		傲慢ナル略歴															
A15	×	訪問				太陽					○						
A16		If I could...	宇宙	火星	地球						○						
A17	×	ユメ			地球						○	戦争					
A18	×	エピソード															
A19		雪はつめたかない				太陽					○						
A20	×	くっしょんをもとむ															
A21		かっでもっていた															
A22		声															
A23		あたたかき室内															
A24		幻想即興															
A25	×	現象															
A26	×	あきらめ															
A27		わたしのキネマ															
A28		演技															
A29		神経															
A30	×	たりないもの															
A31	◎06	絵															
A32		よる															

ノート番号	読集番号	タイトル	宇宙	火星	地球	太陽	月	星	光年	その他	宇宙語	戦争	原子	水爆	兵	銃	その他
A33		歴史															
A34	×	スポット ライト															
A35	×	懐古幻想															
A36		十八才															
A37		あらしのまえの															
A38	◎01	生長															
A39		よび声															
A40	◎05	大志															
A41	◎02	わたくしは	宇宙大								○						
A42	◎04	世代															
A43		夜明け															
A44		犬に															
A45		僕と神様															
A46	×	首都															
A47		青い空に白い雲															
A48	×	Rendez-vous															
A49	◎07	霧雨						星空			○						
A50		反省		火星							○						
A51		クラヴサン															
A52		おそろしいこと	宇宙		地球		月				○						
A53		未来															
A54	×	散髪															
A55		かなしみ	宇宙		地球						○	戦争		水素爆弾	兵隊		
A56		夜の教室				太陽	月				○						
A57	×	うら返してみたら															
A58		抱負	宇宙	火星		太陽	月			太陽系第	○						
A59	×	エピロオグ															
B01		(エピグラフ)															
B02	◎08	春															
B03	◎09	停留所で															
B04		春の道路にバスを待つ															
B05		大望							五億光年		○						
B06		夜の雨の街															
B07		僕は創る															
B08		便り															
B09		波の音を															

ノート番号	読集番号	タイトル	宇宙	火星	地球	太陽	月	星	光年	その他	宇宙語	戦争	原子	水爆	兵	銃	その他
B10	◎10	祈り	宇宙		地球						○						
B11	◎11	かなしみ															
B12	◎12	飛行機雲															
B13		しずかな譚詩		火星	地球	太陽					○						
B14		発見															
B15		行進															
B16	◎13	地球があんまり荒れる日には		火星	地球		月	星			○						
B17	◎14	西暦一九五〇年 三月			地球						○						
B18		鏡の中															
B19		おそれ			地球			星(々)		成層圏	○						
B20	◎15	警告を信ずるうた	宇宙線							ジュピタ	○						
B21		自家用ユートピア															
B22		ミュージアルバム															
B23	◎16	一本のこうもり傘															
B24		葉書															
B25	◎17	電車での素朴な演説															
B26	◎18	机上即興															
B27	◎19	郷愁															
B28	◎20	宿題															
B29		エイプリル・フル風の詩集	宇宙								○						
B30	◎21	周田			地球				十億年	アンドロ	○						
B31	◎22	夜						星空		亜成層圏	○						
B32		東京よ								第三惑星	○						
B33		暖房計画															
B34		神戸から															
B35		夜の駅を発車する						星			○						
B36		魔法			地球						○						
B37	x	旅行															
B38	◎23	はる															
B39	x	都会 1															
B40	x	都会 2															
B41		青い疑ひ			地球	太陽					○		原子				
B42		小さな挽歌															
B43		一日															
B44		海			地球						○						再武装
B45		合唱			地球						○						

ノート番号	読集番号	タイトル	宇宙	火星	地球	太陽	月	星	光年	その他	宇宙語	戦争	原子	水爆	兵	銃	その他
B46		ネオンについての考察											原子				
B47		Crash															
B48		夢															
B49	◎24	和音															
B50	◎25	灰色の舞台															
B51	◎26	博物館								彗星	○		原子				
B52	◎27	二十億光年の孤独		火星 (人	地球				二十億光年		○						
B53	×	新緑		火星							○						
B54	◎28	日日															
B55		Head Light					月				○						
B56		(エピグラフ)															
C01	◎29	それらがすべて僕の病気かもしれ	宇宙							渦状星雲	○						
C02	×	玩具のある風景															
C03	×	カヴァルケエド															
C04		空															
C05	×	ある隅															
C06		常に	宇宙		地球						○						
C07		天使は	宇宙								○						
C08	◎30	五月の無智な街で	宇宙		地球						○	戦禍					
C09	×	賛歌															
C10	◎31	病院															
C11	×	初夏															
C12	◎32	秘密とレントゲン															
C13	×	僕の室内															
C14	×	青い祈りを															
C15	◎33	梅雨															
C16	◎34	ネロ															
C17	◎35	夕立前			地球						○				軍勢		
C18	◎36	演奏								星雲	○						
C19	◎37	メス															
C20	◎03	運命について							五億平方杆		○						
C21	◎38	曇り日に歩く										戦争					
C22	×	このような季節															
C23	◎39	暗い翼					月	星			○						
C24	×	雨が降る			地球						○						
C25	×	戦争について										戦争					

ノート番号	読集番号	タイトル	宇宙	火星	地球	太陽	月	星	光年	その他	宇宙語	戦争	原子	水爆	兵	銃	その他
C26	x	生まレル前ノ譚詩			地球						○						
C27	x	夕暮			地球						○	戦争					
C28	x	その暑い街で僕の見たもの															
C29	◎40	風								成層圏	○						
C30	◎41	現代のお三時															
C31		計算												水素爆弾			
C32	◎42	山荘だより 1			地球	太陽					○						
C33	◎43	山荘だより 2															
C34	◎44	山荘だより 3				太陽					○						
C35	◎45	山荘だより 4	宇宙								○						
C36	x	黒い梯子															
C37	x	この混乱の沈殿を												水素爆弾			
C38	x	A LATHENEE FRANCAIS						流星			○						
C39	x	悲しい耳	宇宙		地球						○						
C40	◎47	静かな雨の夜に															
C41	x	また静かな雨の夜に															
C42		小さな火花															
C43	◎46	埴輪	宇宙		地球						○						
C44	x	クリスマス															
C45	x	旅だち								獅子座、	○		原子				
C46	◎48	一九五一年一月	宇宙		地球		月				○	War	原子爆弾		兵士	銃	
C47	x	譚〈お伽話1〉															
C48	x	昔と今と〈お伽話2〉															
C49		昇天拒否					月	星			○						
C50	x	日日〈お伽話3〉								土星	○						
C51	x	童謡															
C52	x	オート・サイクルについて〈素描1〉															
C53	x	涙〈お伽話4〉															
C54	x	仙人のように仙人のようでなく										戦争					
C55	x	バスについて〈素描2〉															
C56	x	焦燥										戦争					
C57	x	ある近代的な壁面のために〈模様1〉						遊星			○						
C58	x	ある時は場末のところに															
C59	x	古風な筋肉のために〈模様2〉															
C60	x	追憶〈お伽話5〉															
C61	◎49	曇															

ノート番号	読集番号	タイトル	宇宙	火星	地球	太陽	月	星	光年	その他	宇宙語	戦争	原子	水爆	兵	銃	その他
C62	×	微かな季節															
C63		午の食事															爆撃機
C64		弓の朝															
C65		香しい午前															
C66		雨の日日															
C67	×	町〈お伽話 6〉										戦争					
C68		指	宇宙					星星			○						
C69	◎50	初夏						遊星			○						
C70	×	都市〈お伽話 7〉										戦争					
C71	×	少女のような光景〈お伽話 8〉															
C72		悲劇															
C73	×	挽歌 1															
C74	×	挽歌 2															
C75		小さな弟															
C76	×	快よい笑声に															
C77	×	碑銘															銃声
C78	×	地球と骨と			地球						○						
C79		倉庫に															
C80	×	夕暮															
C81	×	今日						星星			○						
C82	×	道にて															

ノートへの登場数	17	7	27	9	9	13	4	12	61	11	5	3	3	2	2
割合	8.6%	3.6%	13.7%	4.6%	4.6%	6.6%	2.0%	6.1%	31.0%	5.6%	2.5%	1.5%	1.5%	1.0%	1.0%
ノートAへの登場数									14						
割合									23.7%						
ノートBへの登場数									20						
割合									35.7%						
ノートCへの登場数									27						
割合									32.9%						
詩集への登場数	8	2	10	2	3	4	3	7	23	3	2	0			
割合	16.0%	4.0%	20.0%	4.0%	6.0%	8.0%	6.0%	14.0%	46.0%	6.0%	4.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%
ノートから詩集への採択率	47.1%	28.6%	37.0%	22.2%	33.3%	30.8%	75.0%	58.3%	37.7%	27.3%	40.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%

【資料B】 『二十億光年の孤独』 詩集本文・ノート本文 異同表

■ノート「傲慢ナル略歴Ⅰ」

収録順	タイトル	詩集本文	ノート本文
06	絵	雲はくらく	雲は暗く
02	わたくしは	えへん わたくしはあるいている	えへん、わたくしはあるいている

■ノート「電車での素朴な演説Ⅱ」

収録順	タイトル	詩集本文	ノート本文
08	春	僕は梅の匂いにおきかえた	僕は梅の匂いにおきかへた
10	祈り	(こわれかけた複雑な機械の歯の一つ)	(こはれかけた複雑な機械の歯の一つ)
11	かなしみ	あの青い空の波の音が聞えるあたりに 僕は余計に悲しくなつてしまつた	あの青い空の波の音が聞こえるあたりに 僕は余計悲しくなつてしまつた
12	飛行機雲	せい一杯な子供の凱歌	せい一杯な子供の凱歌。
		それは芸術	それは芸術。
		無限のキャンパスに描く	無限のキャンパスに画く
		はかない讃美歌の一節	はかない讃美歌の一節。
		春の空	春の空。
17	電車での素朴な演説	乗りあわせただし	乗りあはせたのだし
		必要なのではないでしょうか	必要なのではないでせうか。
		みんなが思えば	みんなが思へば
		みんなの思いで	みんなの思ひで
		運転出来ると僕はほんとに信じています	運転出来ると僕はほんとに信じています。
		書かれなくても美しいところは守れる筈です	書かれなくても美しいところは守れる筈です。
		消そうではありませんか	消そうではありませんか。
		勾配もけわしい というのに 僕には全く堪えられません	勾配もけはしい というのに 僕には全く堪えられません。
19	郷愁	郷愁	郷愁——グリーク・ソナタop.45・第二楽章——
25	灰色の舞台	全く百科辞典の三四行で	全く百科辞典の三、四行で
		乾いた足音ひとつ聞えない	乾いた足音ひとつ聞こえない

■ノート「無題」

収録順	タイトル	詩集本文	ノート本文
29	それらがすべて僕の病気かもしれない	伏せてしまい、	伏せてしまひ、
		救い。	救ひ。
		ガーシュイン ひとつの	ガーシュイン、ひとつの
		オーウェル「一九八四年」	オーウェル、「一九八四年」
30	五月の無智な街で	とりどりの風景をおたがい秘密にしながら	とりどりの風景をおたがひ秘密にしながら
		とりどりの夢をおたがい忘れ合いながら	とりどりの夢をおたがひ忘れ合いながら

		小さな島国のみた そして又みるか もしれない 悪い夢 良い夢―― 〈一杯のクリーム・ソオダを	小さな島国のみた そして又、みる かもしれない 悪い夢 良い夢―― 〈一杯のクリーム・ソオダ を
34	ネロ――愛された小 さな犬に	そして今僕は自分のや又自分のでな いいろいろの夏を思い出している 人間はいつたいう何回位の夏を知 っているのだらうと	そして今僕は自分のや又自分のでな いいろいろの夏を思ひ出している 人間はいつたいう何回位の夏を知 っているのだらうと
03	運命について	〈思い出すね〉 〈思い出すね〉	〈思ひ出すね〉 〈思ひ出すね〉
39	暗い翼	空とそして土の匂い われわれのすべての匂いだ	空とそして土の匂ひ われわれのすべての匂ひだ
41	現代のお三時	*一行削除	(肩をすくめ死を急ぐのか)
42	山荘だより 1	僕は皮膚呼吸している	僕は皮膚呼吸をしている
43	山荘だより 2	記憶は匂いにつてかへつて来 僕は思わず目を閉じた	記憶は匂ひにつてかへつて来 僕は思はず目を閉じた
44	山荘だより 3	いつか時間は静かに空間と重なつて しまい	いつか時間は静かに空間と重なつて しまひ
47	静かな雨の夜に	神を信じないで神のにおいに甘えな がら	神を信じないで 神の臭いに甘えな がら
48	一九五一年一月	*エピグラフ削除 永い闇が私の眼の緑を染めてしまい 「呪いのみが私を支える	War, ~ arms. (Chambers's 20th Century Dintionary) 永い闇が私の眼の緑を染めてしまひ 「呪ひのみが私を支える
49	曇	ワーニヤ伯父さんを観て	――ワーニヤ伯父さんを見て
50	初夏	しかしそれらもまた失われる	しかしそれらもまた失なわれる

※ルビ、字あき、改行、字体に関する異同は除外した。



ネ

口

谷川俊太郎

ネロ — 愛された小さな犬に

ネロ

もうじき又夏がやってくる

お前の舌

お前の眼

お前の晝寝姿が

今はつきりと僕の前によみがえる

お前はたつた二回程夏を知つただけだつた

僕はもう十八回の夏を知っている

そして今僕は自分のや又自分のでないいろいろの夏を

思ひ出している

メゾンラフィットの夏

淀の夏

ウィリアムスバーク橋の夏

いつたい どうするべきなのだらうと

ネロ

お前は死んだ

誰にも知れないようにひとりで遠くへ行つて

お前の聲

お前の感觸

お前の氣持までもが

今はつきりと僕の前によみがえる

しかしネロ

もうじき又夏がやつてくる

新しい無限に廣い夏がやつてくる

そして

夏はやつぱり歩いてゆくだらう

新しい夏をむかえ 秋をむかえ 冬をむかえ

春をむかえ 更に新しい夏を期待して

すべての新しいことを知るために

そして

すべての僕の質問に自ら答えるために

地球があんまり荒れる日には

地球があんまり荒れる日には

僕は火星に呼びかけたくなる

こつちは曇りで

オランの夏

そして僕は考える

人間はいつたいもう何回位の夏を知っているのだらうと

ネロ

もうじき又夏がやってくる

しかしそれはお前のいた夏ではない

又別の夏

全く別の夏なのだ

新しい夏がやつてくる

そして新しいいろいろのことを僕は知つてゆく

美しいこと みにくいこと 僕を元氣づけてくれるようなこと

僕をかなしくするようなこと

そして僕は質問する

いつたい 何だらう

いつたい 何故だらう

氣壓も低く

風は強くなるばかり

おおい

そつちはどうだあ

月がみている

全く冷靜な第三者として

澤山の星の注視が痛い

まだまだ幼い地球の子らよ

地球があんまり荒れる日には

火星の赤さが温いのだ

演奏

そのピアノから薬が匂う

そのピアノがタイプライタアになる

そのピアノには河が流れ

そのピアノは噴火する

そのピアノは白い大きなホオルにある

そして大きなホオルはそのピアノの中にある

そのピアノに人が生まれる

そのピアノに人が死ぬ

そのピアノは空を飛び
そのピアノから星雲が構成される
そして
そのピアノは最後に靜かな遺言をのこした

僕は二千人の仲間と共に拍手をし
その拍手の精氣を紙に記した
病院

青空と太陽とは汚れたクレゾールは溶解され
暗い廊下には科學よりむしろ蝕まれた感情が堆積してゐる

原色のスーツはレントゲンの前に無力である
白衣にさえも慰めはない

患者たちが

色付ガラスの試験管の底に

自分のところをおちおちと閉じこめると

白い醫者たちは

たしかな冷たい機械になつて

たしかな冷たい機械をいじる

いろいろの殘響の中に僕は人の聲を聞かぬ
ここでは すべてが唯物論だ

二十億光年の孤獨

人類は小さな球の上で

眠り起きそして働き

ときどき火星に仲間を欲しがつたりする

火星人は小さな球の上で

何をしてるか 僕は知らない

(或はネリリシ キルルシ ハララしているか)

しかしときどき地球の仲間を欲しがつたりする

それはまつたくたしかなことだ

萬有引力とは

ひき合ひ孤獨の力である

宇宙はひずんでいる

それ故 みんなはもとめ合ひ

宇宙はどんどん膨んでゆく

それ故 みんなは不安である

二十億光年の孤獨に

僕は思はず くしやみをした

病院は秘密のない近代都市に似ている

博物館

石斧など

ガラスのむこうにひつそりして

星座は何度も廻り

たくさんのわれわれは消滅し

たくさんのわれわれは發生し

そして

彗星が何度かぶつかりそうになり

たくさんのお皿などが割られ

南極の上をエスキモー犬が歩き

大きな墳墓は東西で造られ

詩集が何回も捧げられ

最近では

原子をぶつこわしたり

大統領のお嬢さんが歌をうたつたり

そんないろいろのことが

あれからあつた

石斧など

ガラスのむこうに馬鹿にひつそりして

蛇 足 言

三 好 達 治

谷川俊太郎君は今年高等學校を了へたばかりの白面の書生さんである。先日機縁があつてその詩稿の一部を見せてもらった。作品は例外なく私にはみな面白かつたからそのうちの數篇を紹介するために、ここに誌面をかりた。谷川君の詩風は簡率平明でことさらな巧みを用ひず、所謂モデルニスムの表面的意匠を藉りることをしないが、さすがにその歌ひよりは、ぐんと新しい。奇を用ひることをしないが、内容のみづみづしい躍動とそれを盛るにふさはしい語感語法の新しさをたしかに彼のものとしてゐる。品のいい自然な機智にも富んでゐて、またそれに溺れることをしない用意にも缺けてゐない。そんな點よりも、しかしながら私は彼のリリズムに常に密接に智性の關涉のあるのを喜ぶ。この點が最も新しい。

周りの者が悪いもつかなかった、せむしを殺すおぼろひ
になるような気がしてなりませぬ。まを殺す。夏井
ある人生を演じてきたにすぎない。まは、
まは、皇太子さまという、及びもつかな、男性、果

まをてまを殺すおぼろひのまをてまを殺すおぼろひ
皇太子さまが、皇太子のまをてまを殺すおぼろひ
まをてまを殺すおぼろひのまをてまを殺すおぼろひ

まず人間として生きて下さい

谷川俊太郎

「御幸福ですか」とまずお訊ねするの許して下さい。
この夏、北野井沢でたまにあなたを見かけました。
た。海風の真上白いよれよれの服が印象的で
僕は楽しかった。しかしあなたの真面目な姿が、夏の高
原の空をききれやとんばや。そうとうもの明るさ
の中にどこかおかしい程遊離して見えのを覚えていま
す。あなたあなたのおつきき遊が、いかにもそこだけ人
間の群をいつたようなものの中で驚愕するものが、あ
の美しい夏の高原の空気とあまりにも異なるものに見え
たのでした。

この夏は長い間軽井沢にいらっして、しかしそこ
でもあなたはやはり「皇太子」でいなければならなかつ
たのでしたか。ブライズ氏の「あなたは皇太子になら
れたのですか、それともふつうの少年になられたのです
か？」という問に対してあなたが「わかりません、僕は

ふつうの子供になったことがないんですから」と答えら
れたという話を僕は、僕はやはりあなたの不幸を感じま
した。あなたは「僕はふつうの子供ですよ」とけげんな
顔をしてブライズ氏を見返すことが出来なかつた。あな
たは自分が「皇太子」であり、「ふつうの子供」ではな
いと思っている。僕はあなたの素直さを感じます。しか
し「皇太子」であり「ふつうの子供」であることがもつ
と天知なのではないでしょうか。東條英機は「ふつう
の子供」である筈なのです。夏の陽の下にいる時、あな
たの家庭の中にいる時、また、馬を駆りさせる時、そし
てもっと大きくあなたが生きるこの中に自分を感じる
時、あなたは地球上のすべての人間、サラリーマンであ
れ、乞食であれ、白人であれ、黒人であれ、そのような
人間のひとりである筈です。生きるということももっとも
深いところで、あなたはそれらすべての人々と同じな

り、また、それと同時にあなたは全くひとりぼっちの筈
なのです。そこには侍従もいないし、友人もいない、日
本国民もなければ、共産主義者もない、あなたはひとり
で生まれ、ひとりで生き、ひとりで死なねばならぬ筈な
のです。「そんなこととくに感じていない」とあなたが
おっしゃってくださった僕は僕は大層嬉しいですよ。高原
の夏の空気の中で、そこだけどこかちっぽけな城のよう
にたまたまいていたあなたのおつきき遊、そういう世界に多
く住まねばならぬあなたの不幸を僕は感じてしまつたの
です。あなたのおつききの中で、日本人の中で、各国外交官
の中で、あなたは「皇太子」です。しかし学校であなたは
は「生徒」であり、家庭であなたは「息子」であり、や
がてあなたの妻にとってあなたは「夫」であるでしょ
う。そしてなによりも「生きる」という中であなたはま
ず人間です。世界中のすべての人と交る所のない人間で
す。そこであなたはすべての人々を手をつなぎ、また手
をつなぎながらもひとりの筈です。

そこから出発していただきました。僕はそう思います。
ヴァイニング夫人の「皇太子のための窓」の要約を眺ん
でいて、あなたの「私は天皇にならねばならない」とい
う言葉によつかりました。今でもそう思いにたつて、
られるのでしょうか。「私は天皇になる」とこの言葉から
僕は解つたのです。この言葉には自分の未来を運ぶこと
する意図があります。しかし、天皇にならねばならな
い。この言葉にはどこか間違つたあきらめの響きがある

ように思えます。あなたは義務の意味を「そう云われたの
からしれぬ。しかしヴァイニング夫人は、陛下には何にな
りたい」と問題をはなつた、陛下は自分の運命を知つ
ていてそれを受け入れていた、と答えています。もしそ
うなら何とさびしいことでしょうか。自分の生き方自分で
選ぼうとしないうちは、あなたは天皇にならなかつた
でいいのです。あなたは若者にならうと、革命家になら
うと、大工にならうとかわまわらない筈です。あなたが自
分自身を検討し、自分自身の情熱を感じ、自分自身を運
ぶのなら、あなたの前には無限の運命がある筈です。あ
なたがそのような多くの運命の中から天皇になることを
選んだのなら僕は云つてはなりません。あなたが冷静
な強い、そして熱した政治家になつて下さるのをお
願ひするだけです。僕は政治にはうとい人間です。天皇
制についても何とも云えない。しかしあなたは考へて
いただきたい。冷静に天皇制というものについて考へて
ほしいと思います。そしてあなたが信じたことについて
は勇気であつてほしいと思います。あなたが天皇になる
ことを選ばれるにしろ、選ばれぬにしろ、あなたは「皇
太子」であるという場で、多くの人々に對して責任があ
るといふことをいつも思い出していただきたい。あなた
は「皇太子」に生まれてしまった。その限りにおいてあ
なたには「皇太子」としての義務と責任とがある。しか
し同時にまた、あなたは自分の未来を自分で運ぶことが
出来ます。あなたはまず人間として生きることが出来ま

1952.12 11100